

青年海外協力隊 19 年度 2 次隊

職種：美容師

任期：2007 年 9 月～2009 年 9 月

配属先：技術教育・職業訓練省

ノクム女性研修センター

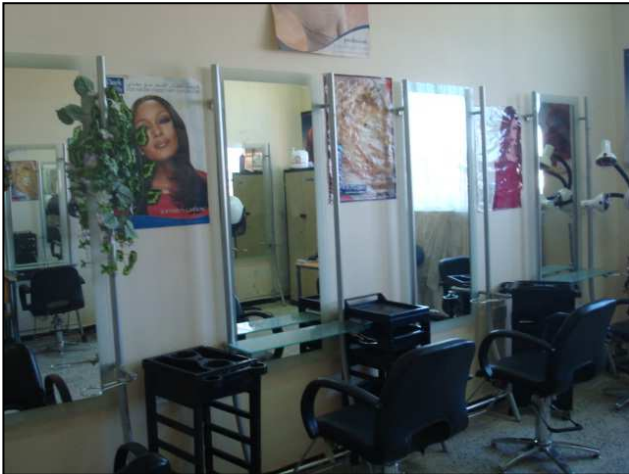
任地：首都サナア

女性が働く事の難しさ

【アバヤの下はお洒落な女性】

イエメン女性はアバヤ（衣服の上から着る黒い布）やブルカ（顔を覆う黒い布で目元が 2cm くらい開いている程度）を羽織っているため、肌や髪は見えません。そのため赴任前は、イエメン人女性の髪型や普段の服装などの情報が全くなく、何を指導して良いのかあまり想像ができませんでした。

しかし、ボランティア活動開始後、生徒たちを観察しているとアバヤの下は日本の 10 代の女性と同じような服装でした。また、興味のあることや恋愛・お洒落の事など、どの国でも若い女の子たちの感覚はそんなに変わらないのだなと感じました。



美容科の教室

【最初に行ったアンケート結果は・・・】

卒業後にどういう事をしたいのか？なぜ美容科に通おうと思ったのか？を聞いてみました。生徒達の回答は『美容室を持ちたい』、『お金を稼ぎたい』、『高校や大学に行くのが嫌だから』、『本当は働きたいけど親が許してくれない』などの回答でした。

イエメンでは 10 代で結婚し家庭に入る女性が多く、自立して働いている女性はまだまだ少ないのです。このようなイエメンにおいて、職業訓練校で技術を身に付けて働こうと考えている女性は、その両親も含め、革新的な人たちなのだろうと考えていた私は、アンケートの回答に驚かされました。

【いつか働ける時代が来ることを願って】

実際に授業をしている際、将来美容師として働こうと考えている生徒と、そうでない生徒とでは授業に対する姿勢の温度差を感じます。しかし、今は働けない、もしくは働く気がない生徒も学校に通うその 2 年間、もしくは卒業後に働ける状況になるかもしれません。そのことを願いながら、基本の練習を繰り返しつつ、興味を持ってもらえるように新しいことも適度に取り入れながら授業をしています。

【残りの任務も】

現状、約半数の生徒が働けない・働く気がないというこの状況は非常に残念に思うのと同時に、自身のボランティア活動を進める上での悩みでもあります。しかし、日本および先進国と呼ばれる他の国々もその昔、社会進出した女性は少数だったであろうと思います。そして彼女らはかなり異端だったのではないのでしょうか。長い年月をかけて女性の地位というものを築いてきたことでしょう。

ここイエメンでも、私が活動している 2 年間や、今後数年では大きな変化はないかもしれません。たとえ時間がかかっても、今、私が指導している生徒たちがイエメンの女性社会に少しでも影響を与えるような存在になってくれることを願い、残りの活動をがんばっていきたくと考えています。



美容科と被服科のスタッフ

青年海外協力隊 19 年度 4 次隊

職種：プログラムオフィサー

任期：2008 年 3 月～2010 年 3 月

配属先：社会福祉のための慈善協会 女性部

任地：首都サナア

アフダームと 呼ばれる人々の生活

【イエメンで生きる様々な背景をもつ人々】

ここイエメンでは人口の大半がアラブ人である一方、アフリカ系の人々も生活しています。その中には社会の辺境で生活している人々もおおり、主にふた通りの背景を持つグループに分かれます。

ひとつは近年のソマリア等の国内紛争から逃れてきた避難民。その多くが学歴はあるが母国語ではないアラビア語の読み書きができない人も多く、ここイエメンでは仕事に就けたとしても低所得の仕事（家政婦、洗車など）に限られています。

他方、アフリカ大陸とアラビア半島の歴史的な交易により、その昔イエメンに移り住んだ人々がいます。1500 年以上前にさかのぼるエチオピア統治時代に移り住んだエチオピア兵士達は統治終了にともない、召使（アフダーム）という身分を受け入れることで、イエメンの地で生活し続ける事を認められました。

この様な階級制度は 1962 年の革命後に撤廃されたにもかかわらず、未だに彼らの子孫と言われているアフリカ系の人々は差別的扱いを受けているのがイエメンの現状です。

【アンケート調査の実施】

今回、配属先 NGO ではこの『アフダーム』と蔑称される、社会の辺境的地位に追いやられたグループ（ムハマシーン）を対象とした世帯調査を首都サナアの 5 地域で実施しました。彼らの直面している問題や課題を把握し、解決策となる支援活動プロジェクトを立案・施行をする事を目的としています。この世帯アンケートは、保健、栄養、経済、教育状況を知る為の質問内容となっています。



世帯調査に協力する家族



シートを覆った簡易住居で暮らす子供達

【調査によって浮き彫りになる現実】

最下層として奴隷的扱いを受けていた時代の流れで、現在もその子孫といわれる人々の多くは低所得の職につくか、不規則な仕事に従事するか、物乞いの生活を送るかの選択肢しかありません。

低所得にも関わらず、首都サナアでは彼らの目を見張るほどの働きぶりに遭遇します。清掃員として早朝からサナア市内を清掃し、午後に街中のゴミ回収をしているのはアフリカ系の人々です。男性だけでなく、女性もいます。又、大人だけでなく、子どもの姿も見かけます。

彼らは清掃員として、ホウキと大きなズダ袋を手
に道路を隅々まで黙々と清掃し、日本政府の支援に
よるゴミ収集車でゴミを回収します。しかし、回収
しきれない(ゴミ処理施設に行き着かない) 廃棄物
やポイ捨てがあとを立たず、一日の終わりにはゴミ
が宙に舞っているのです。

今回調査に協力いただいたコミュニティの中には
大学を卒業していて、英語の読み書きができる人
もいましたが、やはり社会的に差別されている為、
雇用機会に恵まれず普段は道端で靴の修理屋とし
て収入を得るか、奥さんが物乞いに出て得たお金で
生活している家族もいました。

この様に、手に職を持つ人々もありますが、主人が
働きに出ず、女性や子どもたちが物乞いに出て、喜
捨してもらったお金で一家の生活を支えていると
いう世帯も多くありました。女性たちによると、街
で物乞いする際に、汚い言葉を投げられたり、押し
倒されたりといった暴力を受ける事もあり、辛い思
いをしているという声を聞きました。



十分な栄養素を確保できない食事

又、一日の終わりに得たお金は主人に渡さなけれ
ばいけない為、彼女たちが自分自身や子ども達の為
に自由に使えるお金はほとんど残りません。調査地
域は貧困層であるにもかかわらず、タバコやカート
(覚醒作用がある薬) といった嗜好品を消費してい
る男性を頻繁に見かけました。

貧困生活という不安定な環境により、心身の健康
状態を本当に脅かされているのは大人ではなく、子
ども達なのではないかといった印象を受けました。

調査対象の家庭では不衛生な場所や道具で調理
や洗濯をしている世帯、水や電気などの資源にアク
セスが無い世帯、ビニールでシェルターを作ってい
る世帯を数多く見かけました。なかには乳児の紙お
むつを再度使う為、洗って干している世帯もあり
ました。水資源が無い世帯では、衣料を水で洗えず
に、天日干しのみで再度着用していました。

更に、金銭的な余裕がない為、又、衛生知識に乏
しい為、上着以外何も身に着けてない乳児を度々見
かけました。未熟児を計量する機会も何度かありま
した。生後4日目、体重2400グラムの乳児が不衛
生な家の中で誕生し、その環境で育てられるという
事は先進国の我々からはとても受け入れがたい状
況ですが、彼らにとっては日常なのです。

【調査を通して感じたこと】

イエメンでは人口2100万人の半数近くが1日2
ドル以下で生活を送っています。その様な状況の中
で差別的扱いを受けながら生活を送っている人々
がいます。

今回の調査を通じて、普段聞くことができない彼
らの声を聞くことにより、社会的弱者に目を向ける
事と彼らの直面している問題点を解決することの
必要性を強く感じました。今回の情報収集活動には
多くのコミュニティ・ボランティアの協力を得てお
り、その意欲と誠意に感化される事が多く、自分自
身のボランティア精神を触発される機会になりまし
た。調査対象者の中には『自分たちの情報を提供
するだけで、これまで何も利益を得ることがなかつ
たから協力したくない』という態度を示す人もいま
ましたが、コミュニティ・ボランティアの説得や他の
対象者の協力のおかげでその様な態度をとってい
た人達も最終的には情報を提供してくれました。

イエメン人の同僚は『貧困層の人々が貧しい生活
を送っているのは、彼らの怠慢のせいで社会的に差
別はない』と主張します。しかし、今回の調査をき
っかけとして同僚の差別的な視点を改める機会に
なってくれたらと思います。私自身も同僚やコミュ
ニティの人々と共に、イエメンが抱える様々な問題
点を正確に把握する力、そして、その解決策を立案
・実行する力を培うことができればと思います。

インタビュー

『イエメンの日常文化』

今回のインタビューは、ハーディー氏に日常生活の各場面におけるイエメン文化をそれぞれ紹介して頂きました。

【買い物編---周りの男性から守る---】

イエメンでは、買い物時など基本的に女性一人での外出は控えます。女性は、家族や友人と共に複数人で外出することを励行します。理由は、一部の男性が信用できない事にあります。少しでも体のラインが出るお洒落なアバヤ（衣服を覆う黒い布）を着ている若い女性が居ようものなら、その女性を凝視する男性がいるのです。ブルカ（顔を覆う黒い布地）をしていない若い女性が居るときも同様です。

もし、男女間のトラブルや婚前交渉が発覚した場合、イエメンではその土地に住むことが出来なくなる事や、親戚と会うことが出来なくなる事があります。なぜならば男女間のトラブルは世間に対する『恥』になってしまうからです。そうなることを未然に防ぐためにも女性の一人歩きは、なるべくしないようにするのです。



ブルカ（顔を覆う黒い布地）と
アバヤ（全身を覆う黒い布地）を纏う女性

幼少時、日本語および日本文化に興味を持ち独学にて日本語の学習を始める。その後、日本語学校での学習を経て2004年度日本語能力試験1級を取得。現在はイエメンの首都サナアにて不動産業に従事する一方、日本人の御夫人と共にイエメン日本友好協会の日本語教師としても活動している。

【入浴編---入浴は週に一度のみという噂---】

金曜日の正午の礼拝は、事前に入浴をして全身を清めてから行うのが良いとされているため、多くのイエメン人がこのタイミングで入浴をします。昔のイエメンでは一週間のうち、この『金曜日の正午まえ』にしか入浴をしない人が多いという噂話がありました。なぜなら『入浴=性交渉後』というイメージを持っているイエメン人が多かった為です。

イスラームの教えでは性交渉後は必ず入浴をして身を清めなければいけません。一部のイエメン人は入浴を知られることは、性交渉後と勘違いされると捉えている人がいます。そのため、多くのイエメン人が周りからの誤解を気にする必要が無い『金曜日の正午まえ』に入浴するというのがこの噂話の裏側にあるのです。

【食事編---アラブ文化とイスラーム文化---】

イエメン人の食事姿を見ていると、食べ残しをしている人を見かけますが、これはアラブ文化から由来します。アラブ文化では多くの料理を用意することが客への敬意となり、他方、料理を残すことが主人への敬意となるのです。食べきれず残す量の料理を用意することは、客を御もてなしが出来なかったと捉えるのです。以前、たった2人のお客に対して羊一頭を屠ってもてなしと言う話を聞いたことがあります。

一方、料理を残すことは本来のイスラームの姿ではありません。イスラームでは、貧しい人の気持ち、調理してくれた人への感謝から、残さずきれいに食べなければいけないのです。私の母は敬虔なイスラーム教徒ですので、食べ残しをしているところ見たことがありません。

【ビジネス編---イエメン流ビジネス---】

『時は金なり』という言葉がありますが、その言葉とは反対にイエメン（アラブ）人は長い時間をかけてビジネス交渉をするのが好きです。特に高額取引の交渉の際は、数ヶ月に及ぶことはざらにあります。

売り手はほとんどの場合、実際の希望売値よりも高く設定しています。つまり、交渉を前提とした価格になっている場合がほとんどなのです。交渉の末、値下げをして希望売値で売買することは実は売り手としても嬉しいのです。もちろん、安くなることで買い手も嬉しくなるという事は言うまでもありません。

一見、面倒に思える交渉事も実はお互いが幸せになることが出来るのです。逆に価格交渉をせずにあっさり売買が成立してしまうのは、交渉好きのイエメン人としてはがっかりしてしまうことなのです。

また、売り手の戦略の一つとして、お客に飲み物をご馳走するということがあります。これは飲み物をご馳走することで、今この場で買ってもらうというプレッシャーを暗に与えているのです。アラブ人同士であれば、この戦略を理解することができるのですが、外国人の場合、その意図に気付かず飲み物だけを飲んで帰ってしまうという笑い話を聞いたことがあります。

【室内編---床文化---】

イエメンやサウジアラビア、そしていわゆるガルフと呼ばれる湾岸国はそれぞれ『床文化』を持っています。日本と同じように床に直接座って寛ぐ習慣を持っています。特にマフラージ（床に直接座る応接間）は大切なコミュニケーションの場となります。家族の食事の場所として、気心知れた仲間との談笑の場所として、時には重要なビジネス交渉の場所になります。

ちなみに、イエメンのトイレも日本と同じ和式です。しゃがみ込んで用を足します。ただし、イエメン人は紙を使わず、水と左手（不浄の手）を使って後始末をします。



床に直接座る応接間、マフラージ

【お知らせ】

青年海外協力隊イエメン隊員機関紙 Web 版の配信希望の方は

(jocv.jicayemen @ yemen.net.ye) まで『配信ご希望メールアドレス』をご送付下さい。

【編集後記】

イスラーム国のイエメンは、太陰暦のヒジュラ暦（イスラーム暦）を採用しています。ヒジュラ暦元日(2008年12月29日)は祝日でしたが、翌日以降は通常営業でした。イエメンで迎えるお正月は日本人にとって少し物足りないですが、イスラームの二大祭（断食明け祭、犠牲祭）の盛り上がりは日本の正月に通じるものがあります。(19-1 内田)